



関西大学

大阪都市遺産研究センター

Newsletter

No. 7 2012 年 10 月 30 日

目次

第 4 回大阪都市遺産フォーラム「大阪の都市遺産と住友」	1
地域連携事業 平成 24 年度大阪府立中之島図書館特別展	2
地域連携シンポジウム「住吉大社と豊臣期大坂図屏風」	2
「住吉大社と豊臣期大坂図屏風」特別展示	3
宝厳寺唐門の調査	3
新なにわ塾第五弾開講	4
サントリー文化財団 2012 年度研究助成に採択	4
行事予告	4

第 4 回大阪都市遺産フォーラム「大阪の都市遺産と住友」

本研究センター地域連携事業として、平成 24 年 7 月 7 日（土）、大阪府立中之島図書館 3 階文芸ホールで、フォーラム「大阪の都市遺産と住友」が開催された。中之島図書館を大阪の重要な都市遺産として発信し、地域との共存を語り合うのが、本フォーラムの趣旨である。全国から参会の申し込みが殺到し、受付は開会日より半月前にすでに満員となり、当日 122 名の方を迎えた。

藪田貫センター長（関西大学文学部教授）が図書館初代館長今井貫一の功績を紹介した後、図書館と住友家との関係を中心に、3 名のパネリストによる報告が行われた。

朝治啓三研究員（関西大学文学部教授）の報告は「住友文庫の理化学書」と題するものであった。「住友文庫」において、朝治氏は今まで眠っていた大量なドイツの理化学学位論文を整理した。それらの文献を調査した結果、住友家が理科系に特化した文献を図書館に寄付したのは、偶然ではなく、第一次大戦後の大阪の進展及び社会的意欲を反映するのではないかと指摘した。

安国良一氏（住友史料館副館長）は、「住友春翠と中之島図書館」について報告を行った。図書館の寄贈者、住友春翠（吉左衛門友純）は、欧米の図書館・美術館を視察し、民設公営図書館を強く希望していた。その構想



は、中之島図書館によって実現された。住友の寄贈した多様な資料をベースに、大阪の蔵書家から次々に貴重書が提供され、図書館は文化的な公共空間として大阪に根付いたのである。

橋寺知子研究員（関西大学環境都市工学部准教授）の報告は、「住友建築と近代大阪の都市景観」を題するものであった。橋寺氏は、図書館を軸とする近代建築を、写真や図面などから復元し、住友家が大阪の都市景観の変遷に大きく寄与したことを明らかにした。

パネルディスカッションでは、大阪という町人文化の盛んな土地に図書館ができたという歴史的意義、また都

市景観が変化している中で、古い建築の保存と活用について、活発な議論を交わした。最後、野本康憲氏（中之島図書館館長）より閉会のご挨拶をいただき、図書館記念室及び正面玄関の特別公開を実施した。

図書館と人生、図書館と地域など、参加者はそれぞれの思いを込めて、アンケートを寄せた。中之島の目で「見える」近代建築のほかに、目で「見えない」さまざまな証言を集めたのである。

(R.A. 王 海)

地域連携事業 平成 24 年度大阪府立中之島図書館特別展

本研究センターは大阪府立中央図書館、住友史料館の協力のもと、大阪府立中之島図書館と共催で、平成 24 年度特別展「大阪の都市遺産と住友～中之島図書館と住友文庫をめぐる～」を開催した。展示会場となった中之島図書館文芸ホールには、平成 24 年 6 月 26 日から 7 月 6 日の会期中、のべ 1539 名の方が来場した。

明治 37（1904）年 3 月 1 日に開館した大阪図書館（現・中之島図書館）の設立には、住友家が深く関わっている。アメリカの富豪マーシャル・フィールドが寄付したという美術館に感銘を受けた第 15 代住友吉左衛門は、富豪の使命の一つとして公共有用のものを建設したいと考え、明治から大正にかけて数次にわたり、彼が建物並びに図書購入基金を寄付した。

本展では、図書館の創立に関わった第 15 代住友吉左衛門や初代館長今井貫一に迫り、住友家から寄贈された資料や建築物、中之島地区の景観変遷を紹介した。特別展の開催が実現したことは、中之島図書館が将来にわたって文化遺産を保存し公開していく施設となるよう、先人たちがその基盤を作り、それを守り続けてきた人々がいたという証でもあろう。

ここで、関西大学も「住友」と縁があることを紹介し

たい。『関西大学百二十年史』（平成 19 年 3 月 31 日発行、関西大学）に「大学本館になった建物は東区北浜 5 丁目にあった住友合資会社の総事務所だったもので、同社の社屋新築に伴って関西大学が譲り受け」、「昭和 2（1927）年 3 月に移築が完了した」とある。今回の展示で、当時、関西大学本館として移築された建物の「住友阪本展北側建図」が住友史料館から出展されたことは本校にとって注目すべきことである。

(R.A. 岩田 陽子)



地域連携シンポジウム「住吉大社と豊臣期大坂図屏風」

地域連携シンポジウム「住吉大社と豊臣期大坂図屏風—都市の祭礼と信仰をさぐる—」が、平成 24 年 7 月 21 日（土）に開催された。シンポジウムに先立って舞楽が奉納され、貴重な体験となった。

真弓常忠氏（住吉大社宮司）による挨拶で始まったシンポジウムでは、まず住吉大社の小出英詞氏（住吉大社権禰宜）の講演「住吉大社のご祭神と信仰について」が

同社のパンフレットを示しながらおこなわれた。続いて永井規男氏（関西大学名誉教授／住吉大社歴史的建造物調査委員会委員長）の講演「住吉大社の建築物について」に、井浦崇研究員（関西大学総合情報学部准教授）と内田吉哉特別任用研究員による豊臣期大坂図屏風の解説があった。デジタル技術を用い、屏風の絵を現在の地図に即して表示した解説に、来場者は熱心に耳を傾けた。休

憩の際には、隣室で展示されていた大坂図屏風の複製に大勢の人が詰めかけた。黒田一充研究員（関西大学文学部教授）の講演「豊臣期大坂図屏風に描かれた住吉祭」では、現在の住吉大社と屏風絵の比較や、屏風に描かれた祭礼の拡大などデジタル画像をスクリーンに表示して解説がおこなわれた。パネルディスカッションでは、永井規男氏、小出英詞氏、高橋隆博研究員、黒田一充研究員がパネリストとして登壇し、櫻木潤特別任用研究員が進行役を務め、熱い議論が交わされた。藪田貫センター長（関西大学文学部教授）の挨拶で閉会となった。

来場した200名の聴講者は、住吉大社の長い歴史や「豊臣期大坂図屏風」のデジタル化による分析に大きな



関心を寄せていた。

(R.A. 相良 真理子)

「住吉大社と豊臣期大坂図屏風」特別展示

平成24年7月21日（土）住吉大社吉祥殿で、本研究センター地域連携シンポジウム「住吉大社と豊臣期大坂図屏風——都市の祭礼と信仰を探る」の特別展示が行われた。旧暦6月晦日に住吉大社で行われる荒和太祓神事の長い行列は、屏風の主題の一つである。行事、大社を再現する趣旨として、同展示が設けられた。「豊臣期大坂図屏風」（複製）、「住吉大社鳥瞰図」（複製）、京阪土産産所図画より「住吉乃月景」、菅橋彦画「住吉踊」、赤松麟作画集・大阪三十六景より「住吉高燈籠」「住吉大社」、山田伸吉画「住吉大社夏祭り」、「住吉大社鳥瞰図」原図、それに当センターの出版物などが展示された。井浦崇研究員、内田吉哉特別任用研究員、黒田一充研究員による講演の後、聴講者は「豊臣期大坂図屏風」



の前で賑わっていた。

(R.A. 王 海)

宝蔵寺唐門の調査

9月4日から6日にかけて、宝蔵寺（滋賀県長浜市）唐門の調査を行った。宝蔵寺は、琵琶湖に浮かぶ竹生島にある寺院である。

宝蔵寺の唐門は、京都・豊国神社の「極楽門」を移築したものであることが『舜旧記』慶長7年6月11日条から知られる。さらに『義演准后日記』慶長5年5月12日条には、大坂城の極楽橋を豊国神社に移築した記事がある。このことから、宝蔵寺唐門は豊臣期大坂城の唯一現存する遺構である可能性が指摘されている。

本研究センターで研究が進められている「豊臣期大坂図屏風」（オーストリア・エッゲンベルク城蔵）にも廊下橋形式の極楽橋が描かれる。そこで、極楽橋の実相を研究するために、宝蔵寺唐門の調査を実施した。

調査にあたっては宝蔵寺の全面的な協力のもと、部材

の採寸や写真撮影のために作業足場を組み、カメラマンを同行した。本研究センターからは高橋隆博研究員（関西大学文学部教授）、黒田一充研究員（関西大学文学部教授）、長谷洋一研究員（関西大学文学部教授）、北川央



研究員（大阪城天守閣研究主幹）が参加した。また近世美術史の観点から、狩野博幸氏（同志社大学教授）にも調査を依頼した。ほか、内田吉哉（特別任用研究員）、

常行貞臣（事務局）、速水裕子（事務局）が調査に携わった。

（特別任用研究員 内田吉哉）

新なにわ塾第五弾開講

「大阪の足跡から学ぶ文化再発見」を趣旨とし、本研究センター、大阪府立大学、大阪府主催の「大阪と映画文化を考える」新なにわ塾第五弾を開催した。大阪は、日本で最も古くから映画文化が発展してきた都市の一つである。映画は古さと新しさの混在する都市・大阪の姿を記録し、その一方で映画の中に描かれた大阪が多くの人々を魅力してきた。ミナミの南地演舞場でキネトスコープが明治29年に、シネマトグラフが翌30年に上映されて以来、映画館は千日前から新世界、九条、天満

など都市周辺へと広がっていった。本講座は、本研究センター研究員をはじめ、大学教授、博物館学芸員、映画監督など各分野の専門家が、大阪と映画文化の多様な関係について考える。「大阪の映画制作」「大阪の映画館とその記憶」「『反骨魂』と大阪映画」「大阪の小説家と映画」「大阪の風景と戦後日本映画」「『阪本イズム』の外へ：大阪から離れて」といった主題で、平成24年9月27日から12月7日にかけて、計六講が開講されている。

（R.A. 王 海）

サントリー文化財団 2012 年度研究助成に採択

本研究センターのサブテーマA班では、「水都」大阪の伝統文化と暮らしについてのテーマで、道頓堀と浪花文化に関する研究を行っています。

このたび、サントリー文化財団2012年度「地域社会と文化に関するグループ研究助成」の助成対象に選ばれました。研究代表者は藪田貫センター長で、研究テーマは「芝居街道頓堀の復元的研究と都市再生」、助成を受ける期間は2012年8月1日から2013年7月31日までの1年間です。

道頓堀は江戸時代から明治・大正・昭和にかけて芝居小屋を中心として栄えた街でした。1980年代以降中座・角座・朝日座などでの芝居興行が途絶え、1999年の中

座閉館を最後に、道頓堀から劇場が姿を消し、今や写真集や映画、人々の記憶の中にその姿をとどめるのみです。

失われた都市景観をCG画像に復元することにより、失われた時代と場所・生活・記憶が蘇ります。本研究センターでは、すでに大正12年（1923）に松竹座が完成する以前の街並みを中心にコンピュータグラフィックスで復元し、「道頓堀五座の風景」としてホームページでも公開しています。新たに入手した劇場関係資料をもとに最盛期の芝居小屋の劇場空間を復元し、芝居街道頓堀の都市再生について考えます。

（リサーチ・コーディネーター 速水 裕子）

行事予告

本研究センターの主な行事、大阪都市遺産フォーラムは今年第四回を迎える。平成24年12月8日に「道頓堀今昔 松竹座と山田伸吉」を題にして、関西大学千里山キャンパスで行われる予定。それに関連する特別企画

展は12月1日から15日にかけて、関西大学博物館で開催される。参加の申し込みは11月5日ごろより開始する予定である。

（R.A. 王 海）

関西大学大阪都市遺産研究センター NewsLetter No. 7 2012年10月30日発行

発行・編集 関西大学大阪都市遺産研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06-6368-0095 FAX 06-6368-0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/osaka-toshi/>

mail osaka-toshi@ml.kandai.jp

